

関東都市学会ニュース 2021年11月号

(2021-3号)

発行 関東都市学会

〒236-8502 神奈川県横浜市金沢区釜利谷南 3-22-1

関東学院大学社会学部小山弘美研究室内

Tel: 045-786-9369

<E-mail> info@kanto-toshigakkai.com

<http://www.kanto-toshigakkai.com>

「関東都市学会」郵便振替：00130-9-33044、三菱 UFJ 銀行麹町中央支店普通口座 0201604

2021年度の関東都市学会秋季大会を、12月5日(日)に、ZOOMによるオンラインにて開催いたします。会員の皆様にはふるってご参集いただきたくお願いいたします。11月26日(金)までに全学会員にむけてメールでオンライン参加に必要なIDとパスワードをお送りいたします。参加方法の詳細は3ページをご覧ください。ただし、学会に登録されているメールが無効である場合はメールが届きません。メールが届かなかった場合(学会にメールアドレスを未登録の場合を含む)は、事務局(info@kanto-toshigakkai.com)まで、有効なメールアドレスをご連絡ください。

今回の秋季大会では、会員からの紹介による、非会員の方のご参加も受け付けております。参加申し込みの際は、紹介者となる会員から参加者ご本人の氏名、ご連絡先(ZOOMのリンク送付先)、ご所属を事務局へご連絡ください。もしくは、参加者ご本人が、上記の情報とともに紹介者である会員の氏名を事務局へご連絡ください。

また、秋季大会に先立って理事会・各委員会をZOOMによるオンラインにて開催いたします。

関東都市学会 2021年度秋季大会のご案内

開催日：2021年12月5日(日) 14:00-17:30

開催方法：ZOOMによるオンライン開催

主催：関東都市学会

大会テーマ「ウィズコロナ／ポストコロナと都市」

13:40 ZOOM ミーティング開場 *参加方法の詳細は3ページ参照

*接続に不安がある方は開会までの20分の間に接続状況をご確認ください。

14:00~15:40 話題提供

司会・進行：米本 清(関東都市学会研究活動委員長・高崎経済大学)

開会挨拶：大矢根 淳(関東都市学会会長・専修大学)

① 解題・経済学分野からの報告「(仮) コロナ禍と都市の経済・人流」

米本 清(関東都市学会研究活動委員長・高崎経済大学)

② NPO・ボランティア/災害分野からの報告「(仮) コロナ禍における市民活動の展開」
菅 磨志保(関西大学)

③ 社会学分野からの報告「(仮) 都市社会学とソーシャル・ディスタンス」

松尾 浩一郎(帝京大学)

④ 地理学分野からの報告「(仮) 地理学におけるコロナ禍とポストコロナへの模索 —
都市地理学の視点から—」

戸所 隆(高崎経済大学名誉教授)

《10分休憩》

15:50~16:55 質疑応答、グループに分かれてワークショップ

16:55~17:30 全体でのディスカッションとまとめ

関東都市学会理事会・各委員会開催のご案内

2021年12月5日(日) ZOOM ミーティング

【編集委員会】	9:00～10:00
【研究活動委員会】	10:00～11:00
【理事会】	11:00～13:00

秋季大会 解題

大会テーマ 「ウィズコロナ／ポストコロナと都市」

米本 清 (研究活動委員長)

都市というものがなぜ存在するのかを説明するとき、例えば経済系の分野においては、これまで集積の経済や face-to-face コミュニケーションの役割などが挙げられるのが常だった。他の分野でも、例えば「にぎわい」などが肯定的に捉えられ、人々が「密」になって集うことこそが都市の魅力を高め、都市を成立させていることは当然のこととして理解されてきた。しかしながらコロナ禍は、そうした都市の根本的な成立要件に疑問を投げかけている。これまで多くの場合 face-to-face コミュニケーションやにぎわいを重視し、これを促進してきた政府や自治体なども、今や住民になるべくこうしたことを避けるよう要請している。こうした状況を踏まえて、2020年度の日本都市学会やその後の本学会の議論においても、1)都市の脆弱性、2)時空間の再編成、3)都市機能の分散、4)権威主義化などのトピックが検討されてきている。

都市学がこうした事態においてできることは多岐にわたる。第一に、わずかな条件や政策の違いにより、数週間のうちに都市・地域内だけでなく他の地域や国の状況まで悪化させてしまう感染症を抑えるため、各研究者は何ができるか、という、具体的・実践的な方向性もある。また、蔓延により影響を受けているコミュニティや企業、とくに危機に瀕している方々の活動状況などを把握し、これらに対する処方箋を提示する必要性もある。この際、フィールドワークなど研究の方法論に関しても、コロナ禍に対応しながらどの程度充実した調査などを続けることができるか、といった試行錯誤があるかもしれない。第二に、例えばリモートワークの普及や人々の過密に対する考え方の変化など、コロナ禍によって長期的にも移り変わる可能性のあることを示し、それらがどの程度本質的なものなのか（あるいは著しい蔓延期にのみ起きる短期的な変化なのか）を考察するといった、より都市学の基本に迫る方向性もあるだろう。

なおコロナ禍においては、全てのことがまだ流動的であり、議論の前提自体が変化し続けていることにも留意する必要がある。例えばウイルスの性質やその脅威に関しても、まだ検証が続いているだけでなく、新たな変異株が出現するたびに対応や政策を大きく変えなければならない事態となっている。ワクチンの有効性や欠点などについても、各国における接種結果を踏まえてようやく知見が得られつつある段階である。

これまで考察において地道な調査・分析が必要とされてきた学術研究の世界において、研究の前提や対象の現状が数週間単位で大きく変化してしまうという厄介な状況が続きながらも、全国的・世界的に最優先に解決すべき課題として検証を求められているという点、また都市学においてはとくに肯定的に捉えられがちであった集積やにぎわいといったものが、一般的に忌避されるべきものとされる状況で、どのように都市というものを捉えるべきか、といった点など、コロナ禍はわれわれに非常に大きな挑戦をつきつけている。本大会およびこれに関連する各種プロジェクトは、これにどう応じるか、という答えを探す道のりの一部である。

秋季大会への参加方法

★ZOOM への接続方法★

- ① 事務局から送信されたメールに記載されている URL をクリックしてください。そうすると、PC の場合にはアプリがダウンロードされます。ダウンロードしたアプリ（左下に表示される）をクリックすると、インストールが開始されます。インストールが完了すると、ZOOM が開始され「ZOOM を開きますか?」という画面が出るので、「ZOOM を開く」をクリックしてください。
- ② 初めて ZOOM 使う場合は、名前を入れてください。このとき、ニックネームなどではなく、実名を入れてください。ZOOM 経験者の方も必ず実名を表記してください。そちらの名前で学会員であることを確認し、ホスト（管理者）から参加許可を出します。
- ③ 「ミーティングに参加」をクリックしてください。
- ④ ID とパスワードが求められる場合がありますので、事務局から送信されたメールに記載されている ID とパスワードを入力してください。
- ⑤ 「コンピューターでオーディオに参加」をクリックしてください。
- ⑥ ミーティングに参加する際に一度「待機室」でお待ちいただきます。上記のとおりミーティングに参加していただきますと、画面に「ホストの許可をお待ちください」と表示されますので、許可されるまでそのままお待ちください。
- ⑦ ホストが許可したあと、ミーティングへの参加が開始されます。

★参加時の注意点★

- ① マイクは基本的にミュートにして参加してください。
- ② ミーティング中に発言したい場合は、ミュートを解除して発言してください。「挙手ボタン」やチャット機能での発言は全体ミーティングに反映されません。
- ③ グループディスカッションでは、ZOOM のブレイクアウトセッション機能を用います。ZOOM が古いバージョンの場合、正常に動作しない可能性がありますので、事前に ZOOM を最新バージョンへ更新していただきますようお願いいたします。更新方法は ZOOM 公式ページ (<https://support.zoom.us/hc/ja/articles/201362233>) からご確認いただけます。

★事前の接続テストについて★

当日のミーティングは大会開始 20 分前に開場しますので、接続に不安がある方はこの 20 分間に接続状況をご確認ください。または、ZOOM のテストミーティング (<https://zoom.us/test>) にアクセスして事前の接続テストを行うことができます。

お知らせ・募集

【2022 年 3 月研究例会 報告者募集】

2022 年 3 月 12 日（土）に ZOOM によるオンラインにて開催される 2021 年度第 2 回研究例会の報告を募集いたします。報告をご希望の方は氏名、報告タイトル、内容の概要（300 字前後）を文書または E-MAIL で、関東都市学会事務局までお寄せください。2022 年 1 月 12 日（水）を〆切とします。申し込みが〆切を過ぎる場合には事務局までお問合せください。

【2022 年度春季大会 自由報告募集】

2022 年 5 月頃に開催を予定しております、関東都市学会春季大会の自由報告を募集します。報告を希望する方は、「報告タイトル」「報告内容の概要（300 字前後）」「報告者氏名及び所属・連絡先」を明記の上、2022 年 3 月 9 日（水）までに関東都市学会事務局宛にご応募ください。応募は郵送または電子メールによるものとします。

【《来年度》2022 年度秋季大会 企画募集】

来年度の秋季大会は、2022 年 11 月ころの開催を予定しております。については大会企画を広く会員から募集します。広く会員の研究・活動フィールドからの応募をお待ちしています。応募期日等の募集についての詳細は次号のニュースレターでご案内します。この件に関する問い合わせ等は、関東都市学会事務局宛に電子メールにてお願いします。

2021 年度定例理事会報告

2021 年 9 月 25 日に開催された 2021 年度第 2 回理事会の主な内容は次の通りです。

1. 2021 年度秋季大会について

- ・ 2021 年 12 月 5 日（日）に ZOOM によるオンライン開催にて秋季大会を計画しており、米本研究活動委員長がまとめた企画案の方向に基づき実施することを理事会として承認した。
- ・ 秋季大会は非会員にも公開されるものとし、周知方法についても理事会として承認した。

2. 今後の大会・研究例会について

- ・ 2022 年 3 月の研究例会は、研究活動委員長と事務局とで日程および会場の調整を行い、理事会のメール審議を経て決定することが承認された。
- ・ 2022 年度春季大会は、秋季大会の議論をふまえて、新型コロナウイルスに関わるテーマとする方向性で検討していくことが提案され、承認された。日程および会場を含めた詳細は今後検討していくことが確認された。
- ・ 2022 年度秋季大会は、企画公募を 11 月ニュースレターに掲載することが提案され、承認された。
- ・ 2023 年度日本都市学会大会に向けて、2021 年度中に企画・運営体制を立ち上げていく必要性が確認された。

3. 研究活動委員会より

- ・ 当日開催の研究例会の進行方法が説明された。
- ・ 研究活動委員会内にて議論した結果より、上記 1. の議題が提案されたことが確認された。

4. 編集委員会より

- ・ 年報 23 号の編集状況について説明された。
- ・ J-stage への年報バックナンバー掲載は、現在 15～18 号が搭載済みであり、2021 年度中に 10～14 号を掲載する方向で作業を進めることが確認された。

5. 日本都市学会理事会より

- ・ 2021 年 10 月 23 日～24 日に日本都市学会大会が開催されることが確認された。
- ・ 日本都市学会賞（奥井賞）の審議結果が翌日の日本都市学会理事会にて発表されることが確認された。

2021年度臨時理事会（2021年10月13日～10月18日メール審議）報告

2021年9月25日に提案された議題「2. 今後の大会・研究例会について」は、その後メール審議による理事会が開催され、2021年10月18日に次のように承認されました。

1. 3月研究例会の日程について

- ・ 3月研究例会は2022年3月12日（土）に開催することが承認された。

関東都市学会研究例会（2021.9.25）の記録

関東都市学会研究例会 印象記

松橋 達矢（日本大学）

秋雨とともに若干の肌寒さも覚えた2021年9月25日（土）、関東都市学会2021年度第1回研究例会がオンラインにて開催された。今回は、12月5日に開催が予定されている秋季大会企画「ウィズコロナ／ポストコロナと都市（仮）」の「一歩前」として、前半が当該テーマに係る論点整理を企図した浅野幸子氏（早稲田大学）による「新型コロナウイルスと都市」と題された報告に基づく話題提供、後半がZoom「ブレイクアウトセッション」機能を用いての会員間での簡易的なワークショップ形式で構成、非常に熱のこもった議論が展開された。

さて、前半の浅野報告では、新型コロナウイルス感染症という「未知」かつ「不可視」の疫病がもたらす市民生活全般への負の影響としての「インフォデミック」に着目しつつ、その結果露わとされた都市社会システムが潜在的に抱える「軋み」へと言及された。人々の生命や生活を脅かす「リスク」は、とみに個人化の進展する近年、一定程度の階級性・階層性を有しつつも、脱階級的な「発生可能性」が向上（不確実性の増大）したものとみなされる。今日のような「リスクへの不安」に対する人々の反応が過敏化する状況下においては、労働市場や家庭、そして学校や地域社会における再生産の担い手として主要な位置を占めつつも、インフラも含めた各種資源へのアクセシビリティに恵まれない社会的な立場が弱い人々（報告では「脆弱層」と表記）へと負の影響が先鋭化されやすい。とりわけ人々の「移動」を制限しつつ、「ソーシャルディスタンス」拡大戦略のもとで公共空間における「密」の徹底的回避が政策的に求められた東京圏では、これまで通勤／通学など「移動すること」を前提に生活を組み立てる職住分離の空間として組織化されてきたが故に、プライベートとパブリックを接続するための役割を代替的に担う特定職種、そして家事や各種ケアを担う場としての「家／家庭」へと負荷が偏在した点は記憶に新しい。浅野氏が指摘するように、直近において表面化した「リスク」の代表例として研究蓄積の厚い大規模災害との共通点と差異へと目配りしつつ、とかく負荷のかかりやすい脆弱層を包括可能とする都市コミュニティないし都市ガバナンスのありかたを、階層やジェンダー等の観点からとらえ返す重要性が改めて認識されたといえよう。

それを踏まえての後半のワークショップでは、各自の研究・教育生活におけるコロナ禍の諸影響についてグループ単位でざっくりと語りつつ、グループからの復帰後、「ウィズコロナ／ポストコロナ」下における都市の議論可能性について意見交換と共有がなされた。対象設定や調査手法含めた方法論上の困難と新たな可能性の双方を見据えながら、フィールドにおいて、あるいはデータの中にあられる変化の「兆し」にまなざしを向け続ける重要性、そしてこれまでの学問的知見に立脚しながら新たな都市社会システム構想へとつながる「萌芽」を見出していく姿

勢については、多かれ少なかれ共通していたように思う。ただし後者についていえば、当日参加した会員からの発言にあるとおり、都市学会の専門性と領域横断性を活かす形で、「ポストコロナ/ウィズコロナ」時代における都市のフィロソフィーをどのように提示していけるのか、という非常に大きな課題がついて廻ることも確かである。秋季大会に向けて、そしてその先に向けて考えるべきことは多い。